

一学期をふり返って



今井由美子

というなり、むずかる彼女を抱き上げると、そのまま外へ。なんのことはなく彼女は遊びはじめたのです。ある状況にぶつかった時の振舞い方は、一通りでは決まらないということを、まず最初に感じたこととして、私の胸に焼きついてい

るのです。

「さあ、あしたからは夏休みで、幼稚園はお休みだけど、みんな お家で元気に、過ごしましょうね」という、H先生のお話をあとに、いつも通り帰っていく子どもたち、夏休みってわかるかしら、明日の朝、幼稚園に行こうと、とび起きる子は、いないかしら。などと考えながら、新米教師として、もう三ヵ月が経過したことを、改めて感じるのです。

私の場合、新入園児（三歳児）十七名を、ベテランのH先生と、二人で受け持つという形でスタートしました。

入園式もさることながら、その翌日は、いよいよという期待と不安の入り混った気持ちで子どもを迎えていると、どうしても母親と別れられない女児が一人いました。私はまるではれものにでもさわるように、無理に離すことはない、と自分に言い聞かせながら、おもちゃを手にして戸口までいったのですが、予測はみごとにはずれ、お母さまのうしろにかくれるばかり。さあどうしよう、と思っている所へいらっしやったH先生、

「さあ、いらっしやい。遊びましょ」

幼稚園という新しい環境に親しみ、緊張→安定へと変わり、本来の自分の姿をあらわすようすが、各人各様、これほど個性的なものだとは、今まで想像もつきませんでした。いったん遊びはじめると、もうそのことを夢中にやりとげる子。友だちのしていること、もっているものを、すべて保育者の手によって、自分のものにならないと気のすまない子、はでなけんかもするけれど、片時も離れることのない仲良し二人組、またこの三ヵ月では、自分を出しきれなかった子などさまざまです。

子ども同志のふれ合いや、保育者とのふれ合いの中で、この姿は変容し、幾重にも大きなものとなっていくのでしょうか。この子どもへの接し方は、別の子どもにもは通用しないのです。

子どもたちが帰ったあと、私はよく、部屋や砂場を茫然とながめまわすことにしています。すると不思議と、部屋全体や、しまい忘れたおもちゃなどが、何か語りかけているように感じます。Yちゃんにとつて、黒板の溝は、高速道路なのです。その片すみのチョークの箱に、青い車がちょこんと入っているのです。また、積木の下の方から、お人形がでてきました。「今日はひどい目に会った。Tちゃんはおちよとあれていましたよ。私の髪をむしり取るんですよ。そのあげくれだから」あらっ！ブロックが足りないな。と探していると、コーナーの木箱の中に、ゴツリと。きつと、冷蔵庫

にこちそうをたくさん入れておいたのでしょう。あら！ここにもある。コーナーのわきに、ステッキの形をしたブロックの傘が、かかっていました。そういえば「あら、あめよ、あめよ」と、タオルかけにかけてあったタオル、それにふきん、さらにははいていたくつ下までぬいで、コーナーにとりこみ、「それじゃあ、私、お買い物にいってくるわね」と、その傘をさして遊んでいたことが、思い浮かんでくるのでした。

砂場の中や、部屋の入り口に、置き放しになっている、水や砂の入ったビニールの袋。お米屋さんや、ごちそう（コーヒー、おにぎり）の容器として、使われていたのでしょうか。

四月の末、前夜の強風で、桜の花がみごとに散ってしまい、お山への道はピンクのじゅうたんを敷きつめたようでした。さっそくビニール袋をもって拾いに行く

のですが、拾う意味はさまざまです。袋いっぱいにつめこもうと、必死にかき集める子、「先生拾って」と、自分では拾わない子、拾い集めたのを、散らすことに喜びを感じる子、さっそく砂場でごちそうとして使う子。その中に水を入れると、結ぶようにいうのです。何だかわからないままに、その通りにすると、袋を軽く押しながら、うれしそうに「金魚が泳いでいるよ」と話してくれた子もいます。

翌日は、ハッパを入れて、緑色のお魚にした子もいました。一緒にみているこちらにまで、そのすがすがしさが、伝わってくるようでした。よく、迎えにいらっしやった父兄が、子どもの手にしているビニールの袋に、苦笑しているのを見かけます。大人の目には、単に水の入ったビニール袋であっても、子どもにとって、いろいろな意味をもっていることが、わかるのです。幼稚園で気に入った遊びを

そっくりそのまま、家へもつていこうとするのは、当然の欲求といえると思います。

子どもの遊びの中で、物は多種多様の変化をし、意味をもつのだということを知り、さらに、その一つ一つが、子どもの心の中に、生きていると感じられます。私にとって、むしろ柔軟な想像力が大事なことも認めますが、それ以上に、こうした子どもから出た遊びを感じ取る心は、いつまでも失いたくないと、日々感じています。

子どもたちが、慣れてくるにつれ、「そこに登ると危いわよ」とか、「走らないで、じょうずにお部屋まで帰りましょう」「ダメ！ お友だちをぶったりしちゃ」などといった口数が多くなっていることを感じます。ですからなおのこと、遊ぶ時は、小言をいう先生から、一緒に遊ぶ友だちへ大変身という意気込みで、遊ぼうとつ

つとめてきました。ところが、やはりこの園内でも限界を感じることがあります。そんな時、中学校のグラウンドまで足をのばしたのです。何もない広がりを感じると、自然と足は早くなるのです。飛行機になって空をとんだり、競走もしました。パンクして捨ててあったボールを、思いっきりけつとばしました。がけをよじ登ったり、かけおりているうち、ウルトラマン太郎も次郎も登場して、意外な仲間意識が生まれもしました。幼稚園にはない赤い花を、必死になってつんでいる女兒たち。

大自然とぶつかり合っている子どもたちには、限らないエネルギーなものを感じます。

☆ ☆ ☆

何かまとまりのない、断片的なことになってしまいましたが、私にとっては一学期のよい反省の機会であり、さらに、

これからの保育者としての自分のあり方を考える、かてとしていくつもりです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

